老荘を説く女占い師 竹村亞紀子さん

占い一先日、全国第二位の製紙メーカー、大昭和製紙の社長更迭劇が実のところ占いの結果によるものであることが明らかになった。また占いは情報としてテレビ、週刊誌から洪水のように流れ出している。しかもコンピューター占いまで登場している。占いは社会の表舞台に現われ、占い情報過多時代ともなった。そこで「ここでは凶、あれでは吉」といった悲喜劇も生まれている。どの占いを信じたらいいのかを占う占いが登場するのではないかとさえ思えるほどである。ところが、このような悩みは中年のみで、若い人たちは占いをひとつのファッションと考えているようだ。ほうりなげたゲタを見て天気占いをするように。このように世代間の差異はあるけれども、占いの功罪を含めて、いろいろと、かまびすく取りざたされる現代占い。

このような流行の最先端をいく女占い師、竹村亞紀子さんを訪れた。彼女はテレビ、週刊誌で活躍中。また美人占い師としても有名とのこと。期待に胸はふくらんだ。「占いの玉手箱」という看板が掛かったドアをノックする。中から「ハァーイ」というカン高い声。まさしくウラル・アルタイ語族ならぬウッソー・アミタイツ語族とでもいうべきギャル特有の声。そして顔はと言えば、噂にたがわずウツクシーイ。推定年齢？歳よりも十歳近く若くみえる。しかもどちらかといえば知性的な顔。誤解を恐れずに言えば高級クラブの学士ホステスOGという感じ。

そして、声はギャル、顔は二十歳すぎの知性的な顔、そして話はと言えば、たとえば「ローソー」（逆には読まないように、老荘のことです）というように東洋哲学とか、はたまた西洋哲学の構造主義などの難しい哲学用語が次々と出てくる。占い師にありがちな「神のお告げ」などという、いかがわしい表現は出てこない。

〝こりゃ、霊感はあきられたから、今度は新手のこけおどしか〟とも思ったが、さにあらず。「易とは四書五経によるものです」とのこと。由緒正しいのだそうだ。占いといえば、霊感を思いうかべてしまうが、竹村さんの場合は違う。本人も「占いと霊感とは違います。私には霊感はありません。」と語っている。と言っても竹村さんにおもしろいエピソードがないわけではない。中学生時代、地下鉄の改札口もフリーパスだったそうだ。駅員との意識を断つことによって可能となるのだと言う。ところが、これには失敗談も。東京のレストランでは完全に失敗。「修業が足らなかった」と言う。

竹村さんは手相、人相、易、タロットカード、姓名判断、数霊、星占い、西洋古星術など占い百般をこなす。サイコロ二つを使った奇数、偶数かをみる占いはしないそうだ。そして、竹村さんは次のように言う。「困った時の神頼みは困ります。依頼心を持ってはいけません」と。けげんな顔をしていると、「占いとは、情報サービスです。そして、その情報を選択し行動するのは、あくまでも本人です」と説明してくれた。

そして、最近「不確実、不安定な時代を反映するように」依頼客はふえてきていて、その客層は若い女性から壮年の男性まで幅広い。なかでも最近は経営者による人事に関する相談が増えている。「〇〇を採用してもいいのか」とか「〇〇を課長にしてもいいのか」などという相談があるそうだ。美人で聡明でしかもイデオロギッシュな竹村さんにおじさんたちは感わされる（？）のであろう。判断に困った時にのみ相談するのだと思うが、若干、背筋が寒くなることではある。また、時代は変わっても不滅なのは色恋ざた。やはり、多くの悩める男女が訪れるらしい。いろいろとおもしろい話があるそうだが、この話は略。

こうした仕事以外にも、占い企画のマネジメントや、はてまたテレビの司会者、経営セミナーでの講演までこなす。竹村さんは七色仮面でありスーパーウーマンだ。しかも、このうえに、若々しく美しく理智的で聡明（順不同です）ときている。本当に贅沢な人だ。

ところが、占いといえば、あいまいさが命。ゲタを投げて結果が悪ければ、もう一度投げればいいし、結果良ければそれで良し、というものであろう。また、銀座なんとかのドギツイ厚化粧によって醸しだされるいかがわしい雰囲気や、ものにとりつかれたような眼をして「〇〇がみえます」と語る田中なんとかの不思議な魅力も捨てがたい。完全無欠の竹村さんの場合、少しさみしいような気がする。でもきれいだから許してしまいそう。なににつけても美人は得だなぁ。